

大阪市立住まいのミュージアム

「大阪市立住まいのミュージアム」（愛称：大阪くらしの今昔館）は、大阪を中心とした住まいの文化に関する資料収集・展示・普及・研究をおこなう歴史系の博物館として、2001年4月に開館した。

なにわ 町家の歳時記



近世の展示室

■展示は、専門家の満足にとどまるだけでなく、市民の目線にたつて歴史を読み解き、その知的好奇心にこたえるように、展示の手法や装置に工夫を凝らしている。近世の展示室は「なにわ 町家の歳時記」をテーマに、日々の暮らしや年中行事にあわせて町家のしつらひを変化させている。すなわち、春から夏は天神祭の宵宮を再現した「夏祭りの飾り」、秋から冬は商いの風景を見せる「商家の賑わい」を展示しており、時間・空間を超えた体験を楽しむことができる。さらに、季節ごとの行事、ワークショップなど、多彩な催しがおこなわれている。町家の座敷では上方落語、上方舞、長唄など、様々な上方芸能が江戸時代の雰囲気の中で演じられ、また茶会や復元料理の試食など、大坂の町家で育まれた生活文化を体験することができる。



夏祭りの飾り



近代の展示室

■ミュージアムの最大の展示品である江戸時代の町並み（実物大）や近代大阪の住宅地の模型は、すべて学問的な裏付けのもとに制作された。とりわけ、住居学・建築学などを専攻する研究者と学芸員が細部にわたる復元の考証にあたり、さらに歴史や民俗・美術などの専門家の監修を受けたものである。すべて膨大な学術的研究成果を踏まえたもので、展示自体が学術論文であると考えられる。また町家の工事は、文化財修復に実績のある致奇屋大工の手になり、江戸時代の大工技術を駆使したもので、「ほんまもん」に仕上がっている（引用文献：『住まいのかたち 暮らしのなりたい』平凡社刊）。



■地域固有の環境・文化特性を活かした住まい・まちづくりへの市民の関心や欲求は、年々高まりを見せてきている。一方で、魅力的な都市居住を実現するためには、集まって住むことを前提とした質の高い住宅計画と両輪をなす成熟した生活文化の構築が欠かせない。こうした社会のニーズや課題に応えていくために、住まいのミュージアムでは、居住政策の一環として住まい情報センターと連動した学習プログラムを継続的に実践している。例えば、住まいのミュージアムの展示企画を担った研究者等が講師となる「住まいの大阪学」講座は、ボランティア育成の基盤となっている。子どもたちを対象とした生活文化ワークショップは、次世代の「住むまち・大阪」への愛着や誇りを育みつつある。また、大阪市立大学との共催による居住環境学ゼミナールの開催や、地域の文化資源を活かした住環境整備事業等への助言など、専門性を活かしながら市民の住まい・まちづくりに動きかけていく取り組みも重ねている。

町家の催し

